

夜へ急ぐ人

黒崎あかねは妻であることが仕事だ。

語弊のある言い方であるのは重々承知の上だが、そういうほかないのだから仕方がない。だから、夫である黒崎錦之助が亡くなってからも『彼の妻』であることが重要視されてきた。錦之助はヤクザの三代目だった。暴力団黒崎会は、今どき珍しい『一本どっこ』の組織で、裏社会でそれなりの立ち位置を死ぬまで貫き通した。あかねは大学に在学中、金欠で仕方なくバイトしていたクラブで、同じ席についた錦之助から拝み倒され後妻となった。二十一歳の時だった。

彼は確かにヤクザだった。立派なヤマタノオロチの入墨が背中に入っていたし、小指も欠けていた。ただ、何不自由なく生活させてもらったのは感謝している。

しかし、元々人生の目的が希薄だった彼女にとっては、錦之助が死んだ後の人生は長すぎたし——周りの人間が放っておかなかった。

「姐さん。こんなところにお呼びだてして、申し訳ありませんね」

錦之助が死んでからというものの、構成人数百人という黒崎会に跡目争いが起こった。

一人は若頭の佐藤——もうひとりには、舎弟頭だいがしの河本。ヤクザの世界で言えば、ナンバーツである佐藤が継ぐのが常識だ。しかし、佐藤は人望があまりにもなく、組員達の支持も河本に傾いている。

佐藤は、組員達の支持を集めるために、もっと直接的な手段に出ることにした。

それが、錦之助の妻——つまるところ、前組長の妻を口説き落とすことだった。

「どうも料理を楽しむ雰囲気じゃなさそうね」

先月行ったキャンプで撮った作業工程動画のSNSでの反応は良かった。スマホでそれを確認し、顔を上げて見たくもない佐藤の顔を見る。表情から察するに、どうせくだらな話だろうとは思った。

ちょうどクリーニングから返ってきた西陣織のいい着物でも着れば気分も晴れるだろうとやってきたのは間違いだっただかもしれないなかった。

あかねはこれまた買ったばかり卸したての、同じく綴織の硬さが取れぬ帯に違和感を覚えながら、佐藤の鋭い目を見据えた。

味方でないヤクザというのは、どういう立ち位置であれ総じて獣だ。視線を逸らせば食われる。

「俺ア、まどろっこしいのは嫌いですよ。単刀直入に言います。姐さん、俺の跡目を推してください」

佐藤はそう言うのと、少しばかり——ほんの少し首を傾けて頭を下げた。

「跡目はあなたじゃないの？」

「河本のオジキは、俺にゃあ組を継がせられんと言ってるんです。姐さんも知つてのとおり、若頭つてのは長男です。組も長男が継ぐのがならいだ。継がせられん納得できないつてんなら、その材料を用意すりゃあいい」

「それがあたしなわけ？ 勘弁してよ。錦ちゃ……あの人はあなたを跡目にするために若頭にしたんでしょ。それ以上あたしがどうこう口を出すわけにはいかないでしょ」

任侠道は男の筋道、生き様である。細かな風習・不文律もあるが、いずれにしろ組員でもないあかねが口を出す問題ではない。錦之助にも、それは強く言われていた。

おめえが口出すような稼業じゃねえ。他のモンがなにか言ってきたても、知らぬ存ぜぬで通しな。

結局それが彼の遺言になってしまった。

何よりもどうでも良い。錦之助が死んだ以上、四代目に代替わりしたら組と縁切りする予定だったあかねは、佐藤の勝手な言い分に辟易していた。

「姐さん。そうはいつでも困りますよ」

「困ればいいじゃない。あたし、予定あるの。もう帰るわ」

あかねは立ち上がって、佐藤が引き止める声も聞こえずに、そのまま料亭を去った。雨が降っている。

すぐ近くの駐車場まで小走りで行くと、愛車である軽SUV——あかねの趣味であるキャンプのために買った、オフロード対応の人気車種だ——のトランクを開けた。それなりに神経質な彼女らしく、キャンプ用品がプラスチック製の引き出し型衣装ケースに整然と並んでいる。その脇に、緊急用の傘が入っていた。多少なら大丈夫とはいえ、今着ている着物は正絹製、水分が大敵だ。錦之助が遺した自宅の駐車場には屋根がない。これ以上強くなったら困る——。

そんな考えを浮かべながら、乗車しようと顔を上げると、そこには雨で濡れそぼった佐藤の姿があった。

「何？ まだ何かあるの？」

「姐さん。……俺アヤクザですよ。欲しいものは力づくでも手に入れる。跡目もそうです……ついでにあんたも」

「……冗談よね」

獣臭がするような、鋭く暗い視線があかねを射抜く。寒気がしたのは、この雨のせいだけではない。

「あんたまだ若い。身体だつて持て余してゐるだろう。俺の女になれば、自然と跡目も俺のもとに転がり込んでくる」

「馬鹿言わないで！」

あかねの細い手首に、佐藤の力強い指が食い込む。それはまさしく、獣が獲物を食い散らかさうという理不尽で力づくな行為だった。

後部座席を倒して、そこに荷物を積んでゐるこの車の中では、あかねを蹂躪するだけのスペースなど容易に手に入る。雨の勢いは増し始め、彼女が力の限り叫んでも雨脚に吸い込まれていく。声にならぬ声のまま暴れ、あかねは手近なものを掴んで——着物の襟に顔を埋めながら笑う佐藤の首裏にねじ込んだ。

びくつと体を震わせて、佐藤は一瞬うめき、苦痛に身をよじつてずるりと荷台からずり落ち、砂利の中へとうつぶせに転がった。

どろりと赤い河が広がっていき、雨がその中に吸い込まれていく。

死んだ。殺してしまった。

はずみとはいえ、黒崎会の若頭だ。その意図するところがわからないあかねではない。はだけた着物の襟を正す。帯は床に押し付けられてぐちゃぐちゃになってしまっていた。腰裏に来てゐる腰紐に手をやり、解けてないことに安堵する。

いや、それよりも——佐藤の首裏に刺さったナイフはまずい。あかねの趣味で作った手

製のものだからだ。彼女はそれを強引に引き抜く。血液が飛び散り、傷からどくどくと溢れ出る。

流れていく血と、それを洗い流していく雨——耳煩わしいその音が、あかねのなにかを変えた。ナイフをキャンプ用に用意していたジッパー付きのビニール袋に放り込み、奥に入れていたキャンプ用のモーラナイフを指紋が残らないように慎重にハンカチで包むと、雨が濡れるのも構わずにトランクを閉めた。

屋根代わりになったそれがない中で、佐藤の体は激しい雨脚の中に沈んでいく。

その彼の傷——ナイフを突き刺したまさにその傷に向かつて、再びナイフを突き入れた。できるだけ傷がぐちゃぐちゃになるように、数回。気持ち悪いか罪悪感とか、あかねには考えようもなかった。

どうでも良いのだ。

錦之助は自分のことを愛してくれた。一人の女として見てくれた。しかし、黒崎会の連中ときたら、姐さんとは口で言っただけでも、結局自分のことをモノか何かと思っただけ。態度に透けて見えるのだ。

だから、なってしまったものは仕方ない。錦之助がいない黒崎会に、立てる義理などあろうはずがない。

駐車場に誰も来なかったのは奇跡だと言えるだろう。あかねは転がった遺体に構うこと

なく、車に乗ってエンジンをかけ、アクセルを踏んだ。

「ゆうちゃん？」

ハンズフリー通話で出たのは、堀内ユウトという男である。黒崎会の若衆で、あかねの身の回りの世話をしている。若いながら気が利いて、内縁だが妻がいる点が考慮されたのだ。さすがに巻き込むのに少しばかりの躊躇はあるが、手伝いくらいはしてもらっても構わないだろう。

「姐さん、もうお帰りで？ 若頭とお食事だと聞いてましたが……」

「キャンセルよ。頭きたから出てきちゃった。跡目がどうだこうだなんて話しかしないんだから」

「はあ、そうですか……あの、大丈夫でした？ あんまり悪し様に言いたかないんですが、若頭、手エ早いですから……」

胸元で佐藤の頭が蠢いているような気がして、あかねはたまらず胸元をばんばん払った。気持ちが悪い。返事がないのが気になったのか、ユウトは続けて言った。

「……お食事、用意しておきましょうか？ 召し上がってねえんじゃねえですか？」

「それより、着物がビショビショになっちゃったの。西陣織のおろしたてなのに……泥も跳ねちゃったし、帰ったら脱いでごみ袋に入れとくから、捨てといてくれる？」

「捨てる!? 帯だって確か、買ったばかりじゃ……そりゃ構いませんが……」

あかねは極道の妻としてナメられないように、という錦之助の教えから、着道楽を装っている。着物は好きだが、こんなに持っても仕方ないし着切れない。仕方ないので、数度着たら手放すようにしているのだ。捨てることもないわけではない。不自然には聞こえないはずだ。

「あと、明日からソロキャンに行ってくるから、留守お願いできる？」

『若頭にそんな嫌な気分になされたんで？』

「そういうことよ。不愉快になったわ。着物と留守番、頼んだわね」

返事も待たずに、あかねは通話を切った。不愉快。そう、不愉快だ。嫌なことがあると、ソロキャンに行く。一人になる。孤独であることが、彼女の人間性を守るための唯一の手段だった。

何より、佐藤が死んだとしても、直ちにあかねに疑いが行くとは考えにくい。

彼は黒崎会のナンバーツ。ヤクザ組織の大幹部だ。狙われる理由などいくらでもある。

警視庁組織犯罪対策四課の中村警部補は、強面揃いの四課において、ベビー・フェイスの異名を取る優男である。

ヤクザというのは当然押し出しが強く、自分より弱い態度に出る者とそうでない強者を見分ける能力に長け、前者を嗅ぎ分けるや否や、警察だろうがなんだろうが容赦なく弱み

を突いてくる。

中村はその優男ぶりに反し、何故か相手にそうした弱みを突かせない。不思議とヤクザという人種と相性が良いのだ、というのが持論だ。だからといって、死体となったヤクザとまで絡まされるのはぞつとしない、といつも思う。

殺し——それもヤクザ組織黒崎会の大幹部・佐藤勇作が殺された一報は、早朝に届いた。その日、貸し切り状態になっていた料亭の裏手側——その料亭が借りている駐車場の奥側で、首にナイフが刺さった状態で佐藤が見つかったのは、料亭が閉店になった後のことであつた。

その日、佐藤は自らの渡世の親である故・黒崎の妻、あかねと会っていたが、彼女は二十分ほどの会談のあと、飛び出すように帰ってしまったという。佐藤はそれを追うように傘も差さずに出ていったが戻らない。

佐藤は自分を車で呼び出し、店の前に乗り付けて移動していた。会計も先に済んでいることだし、なにより佐藤がヤクザだということは周知の事実だったので、料亭の人間は不審には思ったが深くは詮索せず、そのまま店を閉めた。

その日は雨が降っており、駐車場近くは街灯も少なく暗かったため、発見されたのは早朝五時。雨が上がって、夜が白んできた頃だつた。

通報を受けた機動捜査隊の初動捜査により、佐藤が黒崎会の若頭であることが判明し、

朝早くから組対四課の黒崎会担当である中村が呼び出されたのだった。

「参りましたねえ……ほんとに死んでるじゃありませんか」

寝起きに叩き起こされて死体の見分、というのは刑事の宿命のようなものだが、いつでもうんざりしてしまう。寝癖だらけの髪をぼりぼり掻き、遺体ホトケの前でとりあえずの手を合わせてから、シートをめくる。佐藤に間違いない。スーツの袖口からも見える、入墨の見切りの特徴も一致する。

「現場責任者は誰です？ 仁義を切つときたいんですが」

組対四課が懸念するのは、黒崎会の跡目争い——そこから派生する内部抗争である。もしこれが佐藤と敵対する誰かの犯行だとすれば、黒崎会の頭を抑えなければ市民に危険が及ぶ可能性がある。殺人事件という括りで言えば、現場責任は捜査一課にあり、四課はそれに相乗りするような形だ。一課に筋を通す——まるでヤクザのような理屈ではあるが、話を通す重要性は、どの時代どの組織も一貫している。

「誰かと思やあ中村警部補キヤッブじゃねえかい。出世してつか？」

鑑識班の制服を来た中年の男が、きさくに声をかけてくる。その声に、中村は少しばかり眠さから覚醒した。

「これはこれは、廣瀬さんじゃありませんか！ ええと、日本橋の時以来ですね」

「相変わらず慇懃だなおめえは。俺は警視庁ホンテンの鑑識課に出戻りよ」

廣瀬は鑑識一本で都内を渡り歩いているが、年も離れた先輩ということもあり、何かと可愛がってもらった仲だ。縦社会であるが故に、現場で見知った人間がいるのはありがたい。

「廣瀬さん、現場責任者は誰ですか？ 黒崎会は跡目でモメてましてね。一課といえども、

不用意に触ると面倒なことになるかもしれないですよ。情報共有もしておきたいですし」

「あー……一課の担当は三条なんですが、今ちっと外してる」

「三条って……『あの』三条さんですか？ 一課きつての有名人の」

「そう言うな。ヤツあデキるんだぜ。近くにコンビニあったら？ 死体の顔は見終わってから大丈夫、朝飯をまだ食ってねえなんて言いやがってよ」

はあ、とどデカイ溜息をついて、わかりましたなんて覇気のない返事をする。三条つばめ警部補。捜査一課の中でも別格の変人として名高いとの噂だ。

会うのに気乗りしない。

朝から変人などと言われる人種に会うのは、カロリーがかかる。中村は本質的に人嫌いなのだ。しかし仕事のためには仕方がない。

コンビニの前まで来ると、背の低いスーツの女——髪留めで髪をアップにしており、足元はスニーカーだ——が、アンパンと牛乳を流し込んでいる。そのそばを通り過ぎると、自動ドアを明けた。

よく通る、少しハスキーな声で、何やら店員に尋ねているものがある。

「ごめんなさい、このコーヒーってデカフェはないのかしら？ わたしね、朝から普通のコーヒー入れるとあんまり調子よくなって……」

「すんまっせつす。うち、デカフェはやってねっす」

金髪のバイトがよくわからない言い回しで断りを入れるが、客——細身の男で、髪型はツীবロック。前髪が長く左目が隠れてしまっている。ど派手な花柄のドレスシャツに、ベストを合わせたスーツスタイルで、その足元は高いヒールだ——は構わず喋っている。

「あらそうなの？ でもその……スムージーと普通のコーヒーって雑味が多いから……どうしようかしら。ココア？ これいいわね。甘くないやつなのこれ？」

「最初から甘いやつつす」

「えっ、そうなの？ あらやだわ、そうよね。普通は甘いものね……あつ、じゃあこのペットボトルの温かいお茶にしましょ。ごめんなさいね迷っちゃつて。コンビニつて色々あるから困っちゃうわ」

男はふふふ、とほほえみながらスマホを取り出し、バーコード決済を済ませて出口へ——つまり中村の前に歩いてきた。

「三条キヤップですわね？」

「えっ、誰？ いやだわ、ごめんなさいね。仕事柄顔はすぐ覚えるんだけど……」

中村は三条を案内するように出入り口のそばへ導くと、警察手帳ポバを見せた。

「はじめまして。組対四課の中村です。三条警部補のお噂はかねがね」

四課と聞いた途端、三条はばあ、と表情を明るくして笑顔を見せた。

「あら。私、安田院課長とは教場が別だけど同期なの。捜査講習も一緒だったのよ。元気してる？」

「はあ、まあ。あの、僕四課で黒崎会の担当で。被害者ガイシヤが若頭だったの、もう聞いてらっしゃいますか」

「いやだわ、中村キャップったら。階級が同じなんだから、別に敬語なんていいのに。

……一応、初動捜査で判明したことについては把握してるわ。捜査も目星をつけてる」

目星？

本格的な捜査や見分が始まって、まだ一時間か二時間と言ったところだ。

「キャップ！ 朝ごはん買えましたか!？」

コンビニのそばに立っていた若い女が、ゴミを袋にまとめながら敬礼した。

「さくらちゃん、えらいじゃない。全部食べられたの？」

さくらと呼ばれた女は褒められたのが嬉しかったのか、胸を張って応えた。

「例えご遺体を見た後でも、朝ごはんをしっかり食べないと捜査に支障をきたしますからね！ 正直に申し上げますと、今回のくらいであれば慣れました！」

「よろしい。刑事は体力勝負だから、早く慣れるのよ」

そう言いつつ、つばめはストローでスムージーをずるずる啜る。中村はそんな二人を怪訝そうに見ながら、つばめの言葉を促した。

「それで、目星は付いてるっていうのは…?」

「現場はもうご覧になったかしら?」

「ええ、まあ。首の後ろを刃物で刺されてましたね。廣瀬^{ヒロセ}巡査部長^{チヨウボウ}さんの見立てじゃ、首裏を刺されたことによる失血性ショックでほとんど即死だそうで」

「中村さんは、どんな犯行だったと考えてらっしゃるのかしら」

「僕の場合は最悪の想定になりますが、佐藤と跡目争いをしてる黒崎会の舎弟頭、河本の手によるものじゃないかと疑ってます。佐藤は若頭で、常識から言えば二代目は間違いなんでしょうが、やつは人望が無くて……」

「んー……最悪ってことならそうかもしれないわね。でも、私の考えは少し違うの」

つばめはスムージーを飲み終わると、さくらと一緒にごみを捨て、現場の方向へ手を差し伸べた。

「まだ遺体はあるはずよ。ちょっとご一緒しない?」

現場はあらかたの情報を取り終わったということで、鑑識班の数は半数になっていた。

規制テープをくぐり、つばめは遺体のそばへ立った。

めくると、苦悶の表情を浮かべた佐藤が現れた。反射的に、しかし事務的にならぬように手を合わせる。刑事の基本だ。

「さくらちゃん。どう思う？」

「大変苦しそうに見えます！」

「……そりゃ亡くなってるんだからそうよ。よってハズレ。中村さんはどう思う？」

「顔に砂利がついてますね。うつ伏せで亡くなったんですか？」

「さすがね。彼は首の後ろに刃物を刺されて、うつ伏せのまま亡くなったの。でも、それだとおかしいことがあるのよ。何故犯人は首の後ろなんか刺したのかしら。さくらちゃん。凶器はなんだった？」

「刃渡り六センチのモーターナイフと呼ばれるキャンプ用のナイフだそうです。一般販売しているもので、販売ルートから追うのは難しいとのことでした！」

佐藤の首には、モーターナイフが体と並行に突き刺さっていた。除去されたそのナイフの刃には、佐藤の血液が付いているので、凶器として使われたのは間違いない。

「特段おかしなふうには思えません」

「ところが変なのよね。死亡推定時刻は昨夜十時頃。この駐車場、砂利を敷いただけの殺風景なところで、ライトやカメラは無い。中村キャップ、あなたの言うとおりの敵がナイフ

で襲ってくるとしたら、どんな風に後ろから襲いかかると思う?」

「そりゃあ、首裏にナイフですからこうやって振りかぶって——あ」

中村は振りかぶって下ろしたときに、その違和感に気づく。佐藤は百八十センチはある。よほどの巨人であれば、刃を寝かせても届こうが、わざわざそうして寝かせて突き刺す意味はあまりない。不自然なのだ。

「それによ。妙な点がある」

廣瀬が三人の後ろに立って、佐藤の傷を指差した。

「さくらちゃん、ちよつと遺体の首元見えるようにしてみな」

「はい! ……何度も刺した傷跡がありますね!」

「それよ。被害者の刺創の大半は横に寝かせた傷だ。致命傷に達してるものもある。だが一個だけ縦——中村がちよつとやってみたみてえな動きでついたんだらうって傷がある。おそらく、これがトドメになったんだと考えられる。正確なところは検死待ちだがよ」

つばめは近くにいた作業員に声をかけ、遺体を運び出すように段取りをつけ、大きく伸びをした。

「さて。中村キャップ、付き合ってくれてありがとう。ここまで見てもらえば、少なくとも内部抗争じゃなさそうということが分かったんじゃないかしら?」

「確かに……少なくともプロの殺しじゃなさそうではありますね」

中村もそれなりの場数を踏んだ刑事だ。よって、この現場の不自然さも理解できる。仮にも組の跡目を取りそうな男を殺すのに、極道ならばこんなはずさんな殺しはしない。ヤクザの殺しはもつとスマートだ。そもそも現場に凶器を残すような真似はしない――。

「しかし、キャップ。ヤクザの殺しではないとすると、一体誰が容疑者なのでしょう？ 通り魔でしょうか!? 緊急配備が必要なのでは!?」

「それにはちよつと時間が経ちすぎね。でもアテはあるの。さくらちゃん、さつそく行きましょうか」

背中を見せて去っていく二人に、中村は慌てて立ち上がり声をかけた。

「三条キャップ。もし差し支えなければ、黒崎会につなぎを入れときましようか？ あと、必要なけりや構わないんですが、参考資料も用意しとくように四課ウチにも繋いどきますよ」
「ぜひお願い。なにが参考になるかわからないし、先方からあんまりやいのやいの言われるの、好きじゃないから」

新宿区歌舞伎町内のビル『株式会社黒崎興行』が、黒崎会というヤクザ組織の本拠地であった。

二十名ほどの組員が常に詰めており、その出入り口は監視カメラに電子錠までついた堅牢なものだ。歌舞伎町という煌めいた街にそぐわない重厚さは、それをもって異質と捉え

ることができる。

即ち、ヤクザの事務所だろうということがまるわかりだ。そんなビルの最上階、会議室内で、舎弟頭の河本シゲルと数名の幹部達が膝を突き合わせ、今後のことについて話し合っていた。

その中で更に異質だったのは、アウトドアスタイルの派手な色のパーカーに動きやすそうなボトムス姿の女性——黒崎あかねが混じっていることだった。

帰りたい。

そう思っても、さすがに出ていくわけにもいかない。あのあと結局そのまま雨が止まず、キャンプに出発しようとしたのは今朝になってからだだった。

しかし、その出発しなげに河本の使いから佐藤の死を知らされた。黒崎会の今後のために、姐さんの意見を見無視できないという理由で、このなんの興味も湧かない幹部会に着のみ着のまま引きずり出されたというわけだ。

「佐藤の若頭カシッが亡くなった以上、河本のオジキに組を継いでもらうってことでいいんじゃないねえですか」

「馬鹿野郎！ 若頭の喪が明けねえうちにそんなことできるかい！」

喧々諤々の言い争いの中、河本は静かに口を開いた。

「……とにかく、おめえらに聞いときたいのはよ。若えのに『走った』連中はいねえって

「ことではないな？」

幹部たちは一斉に押し黙る。河本はつまり、佐藤を独断で殺した人間がいなかどうかを懸念しているのだ。

それは私だ。

あかねは口に出すことも顔に出すこともなく、つまらなそうにそう思った。連中は単に他人や身内に佐藤が殺されたことに対し、悲しさより先に『組織としてメンツが立つかどうか』しか考えていない。人間を見ていないのだ。

「オジキ。若頭をどう思おうが、兄貴分を殺そうなんて連中は黒崎会にやいませんよ」

「他の連中もどうだ？ 先に言っとくが、殺っちゃったもんは仕方ねえんだ。もちろんケジメはつけてもらわなくちゃならねえが、その前に黒崎会の顔が立つようにしなきゃならねえんだからな」

誰も何も言わなかった。あかねには滑稽に思えて仕方がない。この場に存在しない人間を探しているのも同じだからだ。

その時だった。

下の事務所から慌てた様子で下っ端の組員が走ってきて、会議室に飛び込んだのだ。

「オジキ！ 大変です！」

「なんでえ騒々しい」

「警察が表に来てます！」

「……四課の中村の旦那じゃねえのかい」

「一課の三条とか言ってますが。そういや、旦那から先程別の人間が来るつつつツナギがありました」

「馬鹿野郎。そいつを早く言え」

河本は口元を抑え、無精髭をざらりとぞる。捜査一課といえ、殺人事件が担当だ。抗争ディリなら四課が中心になって動くはずだが――。

「分かった。入ってもらえ。言つとくがチャチャ入れんなよ。余計な腹を探られてもつまらねえ」

あかねは何を言われたわけでもなく、ぎゅうと拳をももの上で握りしめた。警察に会う予定なんてなかったのに。

数分もすると、男女の刑事が案内されて入ってくる。当然、あかねや河本も含めていい気分はしない。警察なぞ信用に値しない――それはヤクザであるがゆえの勝手な先入観ではあったが、そうした人種がテリトリーに入ってくる以上、警戒せざるを得ない。

「ご案内どうも。わたし、捜査一課の三条つばめと申します。四課の中村さんが担当だとは聞いていたのだけれど、まあいろいろあって。お話伺えると嬉しいのだけれど」

二人の刑事は会議室の手前の椅子に陣取ると、警察手帳ツロバを見せながら腰を掛けた。